

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：99999

研究種目：奨励研究

研究期間：2022～2022

課題番号：22H04087

研究課題名 中学校の英語の授業で国際共修の理論の確立を図る ―グローバルシチズンを目指して―

研究代表者

若生 深雪 (Wako, Miyuki)

仙台市立上杉山中学校・中学校教諭

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 410,000円

研究成果の概要：公立中学校の英語の授業で、グローバルシチズンを目指す中学生版「国際共修」の理論を構築するために、実証研究によってどのような授業が有効であるかを明らかにすることを課題とした。そのため、中学校2年生の英語の授業で、スロバキアなど数ヶ国の学生と、異なる学習形態での国際交流を設定し実施した。国際的志向性を測定するアンケートなどから効果の比較を試みたところ、交流方法の違いによって、異なる力や国際的な志向性を育むことができることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、中学校の英語教育において、現実の世界で英語を活用するような実践的なアプローチについて、その効果を実証した研究は少ない。本研究の成果は、一般的な公立中学校の学習者が、クロームブックを使用して国際交流を行うことが可能であり、しかもその効果が高いことを示したことだ。また、交流方法を選択し、学習者に育成したい資質・能力に的を絞って的確に身に付けさせることができることも明らかにした。すなわち、クロームブックを国際交流に有効に活用する方法を提示したことは、GIGAスクール構想が掲げる「個別最適な学び」と、教育振興基本計画に掲げる「グローバル人材」を育成することに貢献し、教育的に大変意義深い。

研究分野：グローバル・シティズンシップ教育

キーワード：英語教育 グローバル・シティズンシップ 異文化理解 国際共修 SDGs 市民教育 国際的志向性
gigaスクール構想

1. 研究の目的

本研究の目的は、中学校の英語の授業でグローバルシチズンに必要な力を養成するために、どのような授業が有効なのか(ないのか) 授業内容と指導方略の理論の確立を目指すことである。具体的には、複数の海外協力校と、オンラインやメールで文化交流や課題解決型学習を実施する。そして、共通の指標を用いて、授業の有効性を包括的に評価する。使用する題材を日本の生徒が使用している英語の検定教科書の中から選択し、授業の延長線上にオンライン学習を設定することで、現場で実践可能な中学生版「国際共修」を提案したい。

2. 研究成果

(1) 研究と実践の方法

国際共修とは、言語や文化背景の異なる学習者同士が、多様な考え方を共有、理解・受容し、自己を再解釈し新しい価値観を創造する意味のある交流をする学び合いである(末松他 2019)。本研究は、学習形態の異なる国際交流を実践すれば、学びの効果も異なるのではないかと仮説を立て、授業効果を量的データ(アンケート)と質的データ(学習者の振り返り、インタビュー)から比較・検証した。また考察を元に、中学生版の「国際交流」の授業を提案したい。

研究の枠組みは、Yashima(2019)のコミュニケーションによる意欲の概念である Willingness to communicate(WTC)を使用した。そこでは、国際社会に対する態度を「国際的志向性」と

WTCにつながるとした。交流期間は、2021年9月~2022年3月で、学習者は、仙台市内の公立中学校の2年生の5クラス約140名であった。交流校は、国際NPO法人のiEARN会員である、ジョージア、スロバキア、イラン、モルドバ、台湾の小学生から高校生の幅広い年齢の学生であった。当初は全5クラスに対してタイプの異なる交流方法を実施していたが、実践が進むにつれてその境界があいまいになったので、特徴が顕著であったAとBの2クラスを研究対象とした。Aクラスは、5,6人のグループによる同期型のオンラインでの活動、Bクラスは、海外の生徒と1対1で非同期型のメール交換であった。Aクラスは、自己紹介とそれぞれの国の文化紹介をし、グループで課題解決型学習を実施した。Bクラスは、1対1で交流相手と趣味や日常生活についてメールでのやりとりをした。

(2) 研究結果

国際交流タイプの違いによる学習成果

タイプの異なるAとBクラスの国際的志向性の変化を調査するため、前述したYashima(2019)の国際的志向性の4因子を指標としたアンケート、「身近な異文化へのリアクション(「レストランや駅で困っている外国人がいれば進んで助けると思う」など)」「国際的な仕事に対する興味(「外国で仕事をしてみたい」など)」「違いに対する反応(「習慣や考え方の異なる人と、協力をして物事をするのは楽しい」など)」「海外の出来事に対する関心(「外国に関するニュースを良く見たり、本をよく読んだりする」など)」を行った。グローバルシチズンを測定するこのアンケートは7件法(1.強く反対~7.とても賛成)で全20項目であった。結果は、オンライン交流をしたAクラスでは、「国際的な仕事に対する興味」が、3.71から4.35にポイントが上昇した。メール交換をしたBクラスは、「違いに対する反応」が、4.64から5.13にポイントが上昇した(図1を参照)。両クラスに、交流の楽しさを5件法(1.全く楽しくない~5.とても楽しい)でアンケートしたところ、それぞれの平均値は、Aクラスが4.64、Bクラスが4.57とポイントが同程度であったため、交流への好き嫌いからの、学習効果への影響はなかったと判断した。

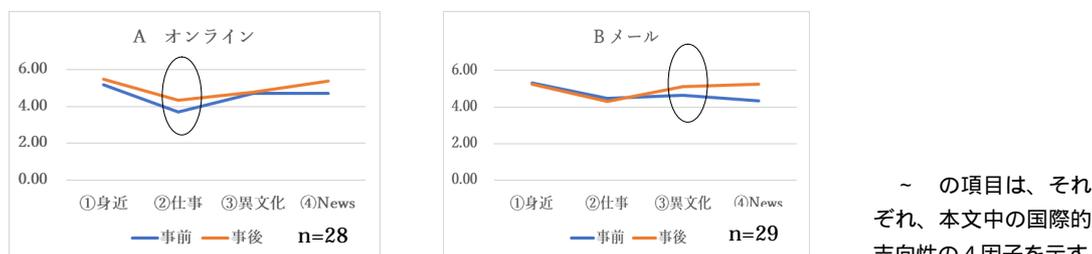


図1 AとBクラスの国際的志向性の変化

次に、両クラスの学習者にインタビューをし、国際交流タイプの違いによる学習成果について、さらに詳しく調査をした。その結果を、交流タイプ別に長所と短所をまとめた(図2参照)。以下は、アンケート調査とインタビューから、それぞれの交流の効果に対して行った、筆者の考察である。Aクラスでは、オンライン交流の即時性や、すぐそこに交流相手がいる臨場感から、自らが海外で仕事をする姿を想起させ、それが実現可能であると思わせる効果があったの

かもしれない。B クラスは、交流相手との1対1の親密さと、メールの媒体的特性から交流者との物理的な距離を近くし、異文化を受容する態度が高まったと分析した。以上の結果は、どのような資質・能力を育てたいかは、交流タイプを選択し実施すれば可能であることを示すであろう。

	オンライン交流・楽しい 平均4.64	メール交換・楽しい 平均4.57
良い点 Pros	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の相手の顔や声を聞いて見れる ・実際に会話ができる ・表情が伝わる ・ALT 以外の人と会話ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・話の内容が整理しやすい ・相手のことが良く知れた ・意味が通じる ・意味のある会話ができる ・話が続くことが楽しかった ・意外な一面が見れる ・家でゆっくり調べられる ・聞きたいことが聞けた ・オンラインより抵抗感がない ・時間に急がされることがない ・考えながら書くことができる ・送りたいときに送れる ・顔が分からない分気軽に書ける ・他の人に聞かれなくていい分だけ ・相手の国で今どんなことが流行しているかなどわかる
悪い点 Cons	<ul style="list-style-type: none"> ・周りに人がいると緊張する ・相手の言った意味が分からない ・聞き返しても分からないだろうと思う ・言っていることが分からないと申し訳ない気持ち ・聞きづらい ・時差がある ・英語の先生が付いてないと何もできない ・システムの不具合で通信が途絶えてしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・返信がすぐに来ない ・自分もちゃんとメールしなかった ・相手が何を考えているのかわかりにくい ・英語の先生を通さず直接のやりとりがいい ・感情がわからない ・忘れてしまうことがある ・話すネタが少ない ・途中で途絶えてしまった ・相手の顔や声が分からない

図2 AとB交流別の短所と長所

ジョージアの生徒との比較

本研究の日本の学習者の全体傾向を把握するために、ジョージアの学生(n=26)と日本の5クラスの学習者(n=139)に対し、それぞれの交流終了後、国際的志向性のアンケートを7件法で行った。結果は、ジョージアの学習者の国際的志向性の高さが際立っていた(図3を参照)。ジョージアでは、7歳から英語学習をスタートし、複言語教育を目指し、欧州の他国での勤務も視野に入れて学習をしている。改めて、日本での異なる人種・文化間の接触が少ない環境が、言語教育に大きく影響していると感じた。また、両国の学習者のインタビューでは、ジョージアの学習者は、日本文化への興味、日本人学生の人柄に対する感想が多く、英語力の向上を目標にしている学習者は見られなかった。それに対して、日本の学習者は、英語習得とジョージア文化に対する感想が半々見られ、両国の交流に対する目的や興味がそもそも異なっていた。

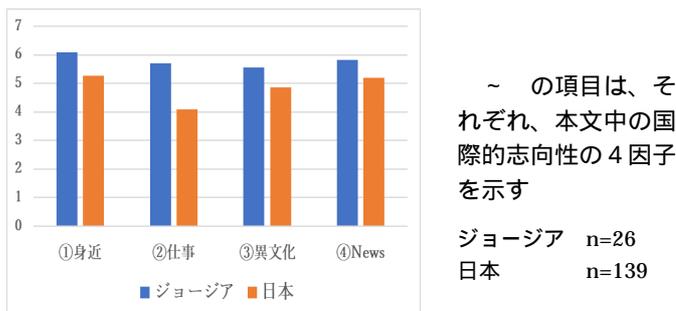


図3 ジョージアと日本の学習者の国際的志向性4要因の比較

(3)まとめ

国際交流の効果を分析し検証した結果、非同期型のメール交換の活動は、異なる相手の考えや文化を受容する態度を高め、顔の見えるオンライン交流は、海外へ行ってみようという外向き志向を強くすることがわかった。どちらの態度・志向性も重要であるため、両方の交流形態を授業に取り入れることが理想であろう。また、中学生にとって、文化交換レベルの交流は可能であったが、学びを「国際共修」まで引き上げるには、双方の国際交流に対する期待のレベル、目的、英語力、学力、学習環境など様々な違いを克服していくことが必要であろう。

参考文献

末松和子・秋庭裕子・米澤由香子(2019).『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信社

Yashima,T,(2009). International posture and the ideal L2 self in Japanese EFL Context. In Dornyei, Z. and Ushioda,E,(Eds.). Motivation, language identity and the L2 self (pp.144-163), UK: Multilingual Matter

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 8
2. 論文標題 Gmailを活用した異文化交流の試み スロバキアの中学生との交流から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際協働学習iEARNレポート	6. 最初と最後の頁 39-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 8
2. 論文標題 SDGsの目標16と17をテーマとする英語の授業の試案 Machinto Hiroshima/Nagasaki for Peaceを通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際協働学習iEARNレポート	6. 最初と最後の頁 37-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 若生深雪
2. 発表標題 中学生版「国際共修の可能性－chromebookを活用して－
3. 学会等名 東北英語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 若生深雪
2. 発表標題 SDGsの目標16と17をテーマとする英語の授業の試案－Machinto-Hiroshima/Nagasaki for Peaceを通して－
3. 学会等名 ジェイアーン活動報告会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------